

23
モロッコ

踊り子一座

宮治 一雄

ベルベルの踊り子

モロッコ庶民の娯楽というと、映画かサッカーの見物、男たちがコーヒ
ー屋で雑談したりトランプやドミノに興ずること、女たちがハンマーム
(公衆浴場)でくつろぎの時を過ごすこと、くらいのものである。それを娯楽産業と呼べるか
どうか迷っているうちに、民族舞踊の踊り子集団のことを思いついた。

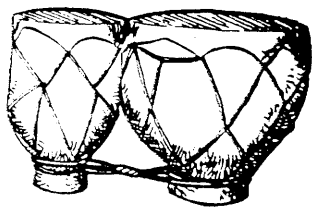
南部モロッコの古都マラーケッシュのジュマー・アルフナー広場などで観光客を相手に芸を
繰り広げる大道芸人の写真を見たことがあるひとは多いだろう。蛇使い、占い、水売りなどと
ともに、踊り子たちの姿も必ず見かけられる。モロッコでは踊りを専業とする集団が古くから
成立しており、芸能に秀でたベルベル系部族が各地方にいたことが知られている。数人の楽師
と踊り子が一座を作って、全国各地をまわり歌や踊りを披露して、なにがしかの報酬を受ける。

芸を見せるほかに女たちが春をひさぐ場合もあって、定住社会からは「流れ者」とみなされ、一段低い身分のものとして扱われた。日本の旅芸人やヨーロッパのジプシーのイメージと共通したものがある。

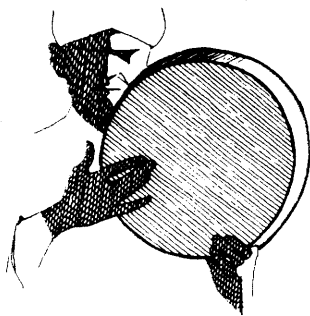
結婚式と観光ショー

現在では踊り子一座の就業機会は、大道芸のほか、家族の祝いの宴席、例えば結婚や割礼の式に招かれて芸を見せることである。楽器の編成は、かつてはタブラ、バンデイル（いずれも太鼓）、ガイタ（スコットランドのバグパイプのようなたたきましい音をたてる笛）などが主だったが、最近ではエレキギターやパーカッションさえも用いられるようになった。モロッコではふつうの人でも女も男も巧みな踊り手が多く、ステップに腰や手の振りをまじえて、近くの踊り手との掛け合いを即興で盛り込みながら、しだいに陶酔し座を盛り上げていく。だから家庭での祝宴には楽師だけで、職業的な踊り子が呼ばれないことも多い。

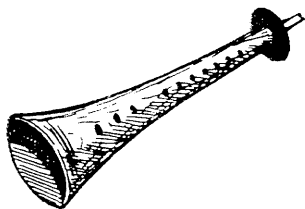
踊り子一座にとって近來ますます広がっている活躍の舞台は、観光客相手のショーである。ホテルなどで民族舞踊のショーがあることが多いが、各地の有名な踊りのサワリを見せるもので、少人数の一座で観光客を満足させるための工夫がこらされているとはいえ、音楽や踊りの質は千差万別であり、ときにはお粗末なものにぶつかることもある。それでもすつとんきような観光客たちは盛大に拍手している。ひと昔前ならアメリカ人観光客がその代表例だったが、



タブラ



バンディール



ガイタ

最近ではわが同胞たちもその仲間入りをして、踊りも見ずにさかんにカメラのフラッシュを光らせている。

マラーケツシュ 民族舞踊祭

質の高い民族舞踊を鑑賞するためなら、毎年六月にマラーケツシュで開催される全国民族舞踊祭のチケツトを手に入れるとよい。筆者は一九八九年に見る機会を得たが、その年の参加数は、全国各地から三四グループであった。サアード朝の宮の廃虚に野外舞台が設営され、夜の帳が完全に下りてから深更まで、各地の代表によって踊りの競演が繰り広げられる。踊りについてはまったくの素人の私が見たか

ぎり、その題材によっておよそ四つの種類に分けることができると思う。

第一は、農作業、狩猟などの生業活動を題材とした踊りである。労働の労苦と収獲の喜びをあらわし、天の恵みに感謝し思わぬ災害に打ちひしがれる姿が描かれる。第二は、戦争をあらわす踊りである。勇ましい出陣から激しい戦闘、凱歌をあげる勝者の蔭には必ず敗者の悲しみがあり、それらが勇壮にあるいは物悲しく表現される。第三は、信仰と結びついたもので、時に激しく時に緩やかな動きによって神と人が媒介される。第四は、恋愛や結婚にかんする踊りである。求愛のモチーフのなかでも日本人に分かりやすいのは、ちょうど「花いちもんめ」のような踊りだろう。男女の踊り手がそれぞれ横列を作って向かい合ったまま、激しく前後に移動する動きを繰り返すうちに、いくつかのカップルが出来上がっていく。

楽師も踊り子も十分に練習を積んでいるし、衣裳にも費用をかけている。道具立ても背景も満点で、さまざまな地方の踊りを質量ともに堪能することができる。舞台上上がる前後の踊り子たちを見かけたかぎりでは若い娘が多いようで、日本の民族舞踊祭のように踊り手の高齢化が進んだり、役場の職員が保存会の中核メンバーになっっているような様子は見受けなかった。娘たちの農作業で荒れた手が舞台の上で優美な動きを作り出す、なんと素晴らしいことではないか。



マラーケッシュ民族舞踊祭ポスター

舞踊祭の観光化と政治化

本来の素朴な性格が失われて、画一化や技巧化が進み、いわば観光化されてしまったのではないか。

さらにいえば、その年はハサン国王の生誕六十年にあたっていたせいもあるが、国王の輝かしい事跡を称えるための演出が加えられていた。観衆のなかには外国人以外に若いモロッコ人も多かったが、フィナーレで国王への歡呼の声を上げている姿が印象的だった。国王は一九六〇年に即位して以来実権を掌握しつづけているが、反対派を弾圧するかたわらで「パンとサーカス」の政策を通じて国民の人気を保ちつづけている。意地悪くいえば、民族舞踊祭もまた国王お声かけの壮大な「サーカス」であり、

国王は踊り子一座の最大のスポンサーにほかならない。

民族芸能は世界のどこでも衰退しつつあり、観光化し政治的に利用されることによって生き残り残れなくなった、といわれている。モロッコにおいても、民族芸能がそういうふうにして保存され、本来の姿から離れてしまう日がやがて来るかもしれないが、まだしばらくは本物を見ることができると思う。こんどの夏にはぜひマラーケッシュに行つて民族舞踊祭を見物するようお勧めしたい。

(みやじ かずお／恵泉女学園大学教授)